



# アイユーゴー通信 第 36 号

〒590-0452 大阪府泉南郡熊取町山の手台 1-22-10

Tel : 072-452-5680

e-mail : [snittaskmj0715@yahoo.co.jp](mailto:snittaskmj0715@yahoo.co.jp)

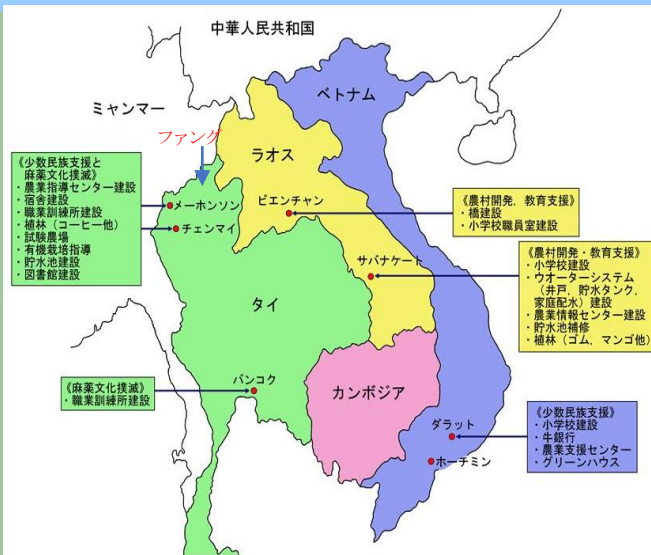
homepage : <http://aiyugo.org/>

## 日・越 (日本・ベトナム) 合同セミナー

はじめに

1. スケジュール<8月18日~8月24日>
2. アイユーゴーのミッション
3. この地における自立支援とは
4. セミナーはダラット大学で

おわりに



## 日・越 (日本・ベトナム) 合同セミナー

はじめに

アイユーゴーの4か国合同セミナーは、タイ(2006年)・ラオス(2009年)・ベトナム(2008年)・日本(2010年)、さらに、2か国のセミナーとして、日越(2016)・日越(2017)・日タイ(2022)などを行ってきた。これらのセミナーは助成団体に申請書を提出し、助成金交付を受けて実施した。条件は、助成金を受け取るが、年齢制限は30歳代までなど、そして完了報告書の提出が義務付けられた。今年、助成金はなく、参加者が参加に係る実費を全額出し、年齢は無制限、旅程はセミナーの内容と無関係でも構わない、ということになった。その分だけ、形式にとらわれなくてすんだ。

今年のセミナーは8月18日から24日までの日程で、ベトナムで実施した。ホーチミンから始まり、2009年に建設した農業支援センターや小学校などのあるラムドン県カチェン郡の村に1泊し、セミナーの会場であるダラット大学へと移動した。参加者は日本からはアイユーゴーの役員で古希前後の高齢者5名と大学生1名、タイからはワチラ(Wachira)と彼の部下(ともに45歳)、ベトナムからは、クワン(Quan)、ヒエン(Hien)、そしてダラット大学の学生数十名、さらにダラット大学の学長、社会福祉学部部長がそれぞれの会場に参加した。

実施に至ったのは、アイユーゴーの海外メンバーからベトナムでセミナーをしましょうという声がかつてきたからだ。ベトナムのクワンに意向を質すと、少し手間取ったが、準備が始まった。ヒエンを通して、カチェンの人民委員会とダラット大学に参加者の名簿と目的を伝えると、すぐに許可が下りた。タイのワチラからは招待状がないと行政の仕事をお休みわけにはいかないと、連絡があった。ベトナムのクワンはすぐさま自分が学長を務める大学が発行した招待状をワチラに送った。

このセミナーの担い手は、各務理事と海外のアイユーゴーのメンバー3名だったと言えよう。若い!!! 右の写真は、2010年に日本(香川県)で実施した合同セミナーに参加したその3名のメンバーだ。左からベトナム代表のクワン、タイ代表ワチラ、ダラット大学教員ヒエン。セミナーはクワンとヒエンが作成したスケジュール通りに実施し、無事終えることができた。



それでは、私たちのセミナーの実施状況をお伝えしよう。

### 1. スケジュール<8月18日~8月24日>

#### < 1 > 8月18日

日本人参加者 6 名がタンソンニャット空港(Tan Son Nhat)に到着した。ほぼ1時間後にタイからワチラたちが到着し、共にホテルに向かった。



タンソンニャット空港にて日本人参加者一同(撮影：新田)

#### < 2 > 8月19日

ラムドン省カチェン郡ダックフォ集落に向かい、人民委員会の会議室であいさつをした後、農業支援センター、グリーンハウス、小学校を訪問した。人民委員会の会議室ではさらにコミュニティハウスの建設を依頼された。



#### < 3 > 8月20日(日)

ロックナムの人民委員会と小学校を訪問した。その後にダラットに向かった。



Loc Nam commune の人民委員会にて挨拶する新田 小学校 (低学年用)

#### < 4 > 8月21日(月)

ダラット大学では社会福祉学部長と学長を表敬訪問した。さらに社会福祉学部を訪問した。(写真：スタッフとともに)



午後、大学の会議室でセミナーを開始した。



#### < 5 > 8月22日(火)

ホテルのチェックアウトを済ますと、Hien の提案で、2013 年 7 月に亡くなられた元アイユーゴーベトナム代表の故タイ氏の奥様の経営するカフェに行った。午後、ホーチミンに帰り、クワンが学長を務める大学を訪問した。



Vietnam National University Ho Chi Minh City

University of Science の Quan 学長室にて

(左からワチラ、新田、クワン、各務、白井、梶山、加藤)

#### < 6 > 8月23日(水)

ホーチミンで戦争証跡博物館と美術館 (Fine Arts Museum) を訪問し、空港に向かった。

#### < 7 > 8月24日(木)

深夜便は午前7時過ぎに関西空港に着陸した。メンバーのうち一人は一日早くベトナムを出国するものもあり、一日後に出国する人たちもあつた。参加者全員がそれぞれ無事に帰国することができた。

### 2. アイユーゴーのミッション

このたび、人民委員会のメンバーに案内されて農業支援センター (以後、センター) に行くと、その荒廃ぶりを見て驚いた。そのメンバーは説明していたようだが、私はこの現場を離れて後に、クワンやヒエン達を通して、廃墟になった経緯を知ることにした。

#### センターとグリーンハウスの建設の目的

センターとグリーンハウスの建設は、国際ボランティア貯金に 2008 年に申請し、2009 年に完成したプロジェクトだ。申請書には、その事業の目的として、「ベトナム社会主義共和国、ラムドン県カチェン郡ダックフォ

集落は、幹線道路(国道 20 号線)から 2 時間程遠く隔たった盆地にある。この集落にはナン、タイ、モンなどの少数民族が多数居住し、品質の低い米、コーン、キャッサバなどを栽培し、市場で売るが、価格が低く、生活苦は恒常的である。この県下でもっとも貧しく、開発を急

がれているのだ。農業情報支援センターを建設し、耕作、家庭菜園、土壌改良などの情報を提供し、技術を指導することにより、村人の生活改善が図られ、健康促進につながり、貧困状態の改良に寄与できる」(国際ボランティア貯金)と訴えた。



(左から完成した農業支援センター、その入り口で村人と(左:新田)、グリーンハウスの鉄骨)

**アイユゴーの NGO としての目的**は、協力を求める少数民族の自立支援にあった。当時アイユゴーのベトナム代表だったダラット大学社会福祉学部のタイ教授とともに、現地へ赴き、現状を確認して建設に協力することにした。申請書の内容が認められて、400 万円相当の寄附金(国際ボランティア貯金)の交付を受けた。

#### 自立支援に必要な事業の継続性

しかし、センターを見て驚いた。センターは見事なまでに荒廃した姿を見せていた。映画の一場面を見ているようで、むしろ面白かった。これは当然、理由があっ

てのことだ。しかし、その理由は今必要ではない。むしろ、考えなければならないのは、この建物は必要だったということだ。建設に協力した私たちにとってはそれが事実だ。事実であれば、現地がこのセンターを必要とすれば、再度、使い始めるだろう。しかし、物事はそう簡単には治まらない。いったん活用が止まってしまうと、動きにくい。例えば、大型のトレーラーが急な斜面を登り切ろうとするときに止められてしまうと、動こうとしてもあまりにも大きくて動けない。むしろ後退してしまう。



#### 現地との信頼関係

一方、日本ではふつう、「責任者を出せ」とくる。「反省させよ」とくる。私にすれば、それらの言葉は、不要で、無意味な言葉だ。これらの言葉に続くことは、反発しかない。他に何かあるだろうか。支援してきた人たちを突き放すことになるのでは? 言われる人たちはすでにこの件に関して悩み、思いを巡らせているはずだから。信頼関係があれば、ただ共にいて進むことだ。

#### 「援助慣れ」

現地の人たちは、「援助慣れ」しているのだ、と言う。これ以上支援するのは無駄だ。確かに日本で、「援助慣れ」という言葉がメディアでもはやされた時期があった。今でも、支援活動をしていると、その言葉を投げかけられることがある。何年支援し続けるのか、と問われる。期限を決めてすべきだと。まるで「働かざるもの食うべからず」とでも言わんとしている。「援助慣れ」と

いう言葉は、援助を受けている人たちをネガティブに考えていることから生じた言葉だろう。彼らは働こうとしても働けない。どうして彼らが、この地で恒常的な貧困から脱することができないのか、考える必要があるはずだ。現場を見れば何かに気づくはずだ。

私たちの自立支援活動は、経済的に停滞し、貧困状況が恒常的な地域、またその住民に対して行っている。

さて、どうしたものだろうか。

#### 困っている人たちとともに

未だに、この地域は財政難に陥っている。人民委員会に招かれた会議室で、人民委員会のメンバーはコミュニティハウスの建設を求めてきた。彼らは、地域の活性化を何とかしようとしている。あきらめているわけではない。私はほっとした。

一方、私は、コミュニティハウスを建設して地域の活性化を図るというよりもっと具体的に地域の人たちの

活性化に向けた事業にしてはどうかと考えた。それは、地域の人々が学べる職業訓練所の建設だ。この建物は地域の人々が参加して地域に貢献できる力をつける場所となるはずだ。帰国後、ベトナムのクワンに連絡し、人

民委員会に問い合わせさせることにした。この事業を勧めながら、農業支援センターの建物の利用を進めていこう、と考えた。

### 3. この地における自立支援とは

アイユーゴーはその目的を「支援を必要としている途上国において、我々が持っている知識や技能、経験を提供し、自立を目指す様々な現地で活動を行うことにより、その地の自然、社会、歴史、文化を尊重し、人と人の交わりを通して相互理解を深め、草の根の友好と親善に努めることを目的とする」(定款)としている。

このセンターに「我々が持っている知識や技能、経験を提供し」たことは一度もない。「知識や技能」を求め

れば実施するだろう、あるいはこちらからしようとすれば実施しただろう。

アイユーゴーがこれまでで行ってきたことは、現地周辺において、低学年用の学校建設等を行うことにより、この地区の人たちとは、クワンとヒエンらを通して、かかわりを持ち続けて来たことだ。地域の人々が手を伸ばせば、いつでもかかわりを持つことができる距離を保ってきた。これは自立支援の方法の一つである。

### 4. セミナーはダラット大学で

ダラット大学では、ヒエンがセミナー開催に向けた準備をしてくれていた。セミナーそのものは、いつものセミナーと比べると、実施した時間はかなり短く、プレゼンテーションの内容も質も全く異なった。すべてにおいて、いつものセミナーとは比較にならない。これまでは、2日間の午前午後通して、十数名の参加者が自分が専攻している分野(医学、保健学、福祉学など)について、

十数分間それぞれ英語でプレゼンした。かれらは自分がプレゼンする前日の深夜まで準備に余念がなかった。

今回は、唯一の大学生の発表以外は、私の話した内容を含め、単に「おっさんの話」で終始した。とはいえ、ベトナムの学生たちには、日ごろほとんど聞かない大人の話として珍しがられたと聞いて驚いた。これもまた、セミナーとして面白いものだったのか。



しかし、今後はこれまでの合同セミナーのように、特定の課題を設定したうえで、内容を高め、プレゼンを通して参加者が互いに質疑応答を重ねるといった経験の場

を提供できればと考えている。

この度の参加者のプレゼンの内容は、参加者それぞれの報告に任せることとしたい。(後に、報告書発行)

### おわりに

このセミナーはこれまでとは異なり、私にとってはいろいろ考えることができる「愉快的」セミナーとなった。それは、若い大学生とアイユーゴーの高齢の仲間たちと一緒に、私自身も参加したからだ。ダラット大学の学生たちを前にして、2、3日で書き上げた原稿を読み上げたのだ。これまでは、私はセミナーの黒子としてお金の算段、スケジュール調整などで、てんてこ舞いするありさまだったから、このセミナーは、読み上げた内容の出来は別として、それだけで何かやり遂げたという気持ちにしてくれた。

ある書物にあった。「人間として生まれたことはありがたい。人はいずれ死ぬ。だから命を燃焼して充実した人生を送ることが大切だ」と。

そして、セミナーは、後藤新平の言葉を借りれば、「財を遺すは下、仕事を遺すは中、人を遺すは上」となるか、皆様のご協力で、皆様とともに実施し続けることができればと思う。

理事長 新田幸夫

\*新田香織理事が2023年2月2日に永眠しました。2006年から2017年までの合同セミナーにおいて厳しい英語指導を担当し、現地に同行していました。ご冥福をお祈りします。

#### <振込先>

特定非営利活動法人アイユーゴー 理事長 新田幸夫

・三井住友銀行 阿倍野支店 : 7, 479, 470 ・ゆうちょ銀行 : 00930-9-144252

発行者: 新田幸夫 印刷: (株) フジカク